C
701
特別
又6
9282
3

文庫6
又6
9282
3

諸教
調子

唐蘇摘句

梅の花をへて
て。日ふ水くみなる
井の花せをしき
匂ひ迫や。鶯はに
ぐいき。

をやとゝふ声
の憩。青葉青柳乐
北牧とうて待川
辻占や嵐なき。
辞うて蛭きゝ
枝きゝぶん。
あら玉
彩まの多の姫

筆とうて一寸書初
め主の名をゝし
ゝ。さッさ
よい〳〵よいさい。
御の柳
ちゝ〳〵の青柳
さへ。アと長風が吹
くわゝ。私の仏花

やちぼうなり　や　ゆふお
才よ　おもきや　や
夕化粧（わうとう　うへうこと）
一輪も　咲けば　梅の　天
がいす　まを　つぐなりや
の　香よ　水　ふと　香
柳の　緑　桜を　咲　し
か　三日月　梅の　夕化粧

実よ　青　孤　じゃ　お
ないろ　い　孔
赤　ぶ　白　し（ゆふぐき　うへうこと）
紅梅　や　娘　ぶ　の　バ
すぶ　強　湯　か　げ
も　ゆ　か　き　陣　子
ごし　ぶ　ら　ぶ　ら　碧
の　つ　ま　ぶ　ら　し　ア　レ

都かたる人ぞなし
しみじみ人目が惜
いでへ

雲のくもり
雲のくもりをかなしむ
の雲の赤かは白
雪の中を抜よく
次くまを風ぞう

き寝さ抜ふせさ
ば波のたかは鶴
みやしろ扇指
子のざんざめく白
やゆかしき白ぞゆ
かしき

桐のあと

桐の雨かなをし袖

濡れ燕尾見や
しん世をでさへ
あれ処をふく撞
て鳴ぬゆむで
苦労しを覗をも
うけてはぐと叔
父へ帰る旅の宮
しるらんはでた

あいかいな
汐干狩 ゆふぐれかへうて
東雲むらふ尺
見すゝ初の浦沖
風情のかくを舟泊
雪の足が見ゆる
ぞへ見ぬかひる汐干
狩弥生のくせの

暑がる。

一部

一部を月が照らす
か部屋。いつしか
あるも短歌の。
まぶ寝やらぬ
夏枕に。男女を
むさらしい。をんな

子をさうじやふ
い。片時あをねば
くよくと。悪病ふ
やうだの。泣いてば
かりゐるこな。

一部

かまつぐ
涙と清よ流れ
のかきたぐ。光

んでゆきしのあと
笠をそなへて来て
かぬきしつぎを見顔
かゝたうをないう
いな

蝙蝠

蝙蝠ぞ出て来て
濠の夕ぐみ川

風さっと吹く牡丹
からゝ仕かりの花
男つまさきの
いつまでも浪光の
水よりつもあるる

夕ぐれ

夕ぐれのながめ見
あかぬ月

又風情をまもる。
帆かけたる舟ぞ見
雪ぞへ。アレ雪が
あく。雪の石の都
又名所があるのかな。

雪の屋根あごたべものを
雪の屋根をアレを
みふへ。乱れなく

づれたかづら。づれ
まをてふ。蔭でかま。
小菊の雪。雪をま
つ虫をだく。雪す
ゝ海ぶふ。舟がふ
垣又。ゝれて遊
ぶ。撞子の。可愛ら
しさとそしらくたと。

飛さうじゃな
いかい。

まつ宵　わがものの
あへうて

永ぶの物さの末べ
き宵なう篠が
よれ。蜘蛛の振ま
ひかねてしも物
ふをたち秋の

れ。寝ようの鐘の
みをづれて待つ宵
をもき更の月。
ゐんなつらしぢゃ
ないぞいい。

海雀あ寺
あれ見やれ世
海雀女の生写

や龍田の紅葉で
さ心なびかっで
八さの風情

七くさ
七草の縋ひ初
白妙の袖を招
く萩の穂を出
でしか宗の後

裾枯萩刈萱
きまぜて茅を寄
ふ丑の中あぐ
る名のたつ女郎
何をうらみて葛
の葉の物忘を
きれかの宮の
ぬ宮のつれなき

をかつぎあせし
わらしかな

伊の雪

わがあとをゝへで
踏き伊の雪恋
の生為を眉よ
かけ妹がら行ら
で冬の狩の川

風寒くふるなく
待ち人つらき毛
ざくつ宝よりかる
せぐなくといる

羽織かくして袖も
羽織かくて袖も
きと見てどうで
しゝ日はいかん

主加。言ひつ立
てはべるまで。
障子細めの刻あ
ら。ら。ら。れ見やし
ゃんせ此雪よ。

青山戸

ふるそ小梅の里
又雪く。蛙の影よ

ぶら尚。あそれを
添ふる紙ぎぬ。
さがらのそと人
の身ハ。あすを知
ふれ女ハ。秋末の風
数を惜む男
等は。みがくれ
青山戸。

ふるさとの月
見るたびごとに
昔をしのぶ
かげぼうしの
すがたをみるさ
ゑがさく田植
度里に袖つま
ひかれて宵過

ふるの眼づかひよ
すわく人間の小
宮ぶし すきま
よ鶴の雲の恋か
しくと流れば
ぶ世理のいな
わしがの
見ぶるぶひよ

西一よ富士の御
山の白雪とけて
りゃすりゃとる水は
きゝ浮名あふ
く浮名あふ
おんとゝさんを
見ど人の心を
あゝ後きゝ名は
んゝ屋ゝ屋ゝやる筆
まなりまし

宇治を屋所
宇治を茶所さま
くの中よ学の
大吉山と人の筆
まあゝ水まあゝ
茶ゝ香ゝ出る好

ゆ国土。粋な浮
世よりはらしい
ちちゃちゃい
葉のなかゝゝゃい
ゆ。

かな文
かき送る文も
どなきいかゝ川の
だそ寝よりの沖
さえて。宕よせか
れて散る浪の。雪
かみぞれの
雪か。とけて流ぐ
の二つ。ゆじ。美を
ひとり。と葉
巻ら古へ。

行末を誰が肌ふ（へふこ）
九紅の玉の
三日の月の眉だ
雪花の玉のまだ
可愛めてと云ふ
ぐと迷へぞるん
お年まで寒さ

やる年まで有るぞか
し。

忍ぶ恋ぢ
忍ぶ恋路をまて
をかなまやる宵
逢ふのが年が
甘涙よりおす
しろい、其の顔

かくす事理なり酒。

首尾の松（ゆふぐれかへうた）

首尾とよく。松

つなぎし恋の綱。

舟で渡りれ欲し

女やり風さそふ

紙縒綱。アレ雪の

肌富士額。紅れ

てつ兎はいそけ船。

渡の車

渡の車を水ゆき

まえる。私しゃ至

んまで宵がまは

る。えんりょわるせが

ないとい。寒やい

るせがないぞエ。

一和歌の頃

和歌の頃は名所
がだらけ一ぱい樫枝
二ぱい玉津島三ぱい
さがり松四ぱい塩
をやき天の橋立
切戸の文珠もん
じゅさんをたれ

ど切れとゝ字
が多すぎるかゝらさッ
さ何とせうどら
せうぞいな。

京の四季

春を忘ぬ花見
ぞんせ東山茶か
爭ふ狂揚や浮

かれて群しぶ
すいし物がい
二本さしてし和
らから紙園豆
蔓の二軒茅屋
御枝で夏を打
ちれて河原よ
つどふ夕涼みよ

いく〳〵くゃ
サア。生い茂がを
らす拾ふ〳〵と。
秋そ〳〵ます草
伊山時雨をいとふ
からかすのぬれて
紅葉のもみ手。
ぬいとそつもら糸山

ゆ〻敷しきてみ
よ雪見酒をし
て櫓のさきむか
ひよいく〳〵
よいヤサア。
瑞瑞やお宝
さがやおるもろ社
純ぶかるうはきふ
てろの粉ぐ。
ムろあ井ちあるよ門
れふそ。お絵づ
らしきあらし山
そおぎえてか見
さ海のをかを寿
おろぐぞあ。おか
ろぐなぬ。飯ぶ

夏に見初めて初
めてもつの此
春のいつ頃おも
ひはむかれて笑
面様といふふを
ものもうちつゝ
寄るみ女子の初
ぶけふの尽くぶ

てうい時あ
ふ寄うたびを
らてをやまんを
ゆゝと形ながら
夏あかぶむかの
てゝ形やうぶ

紀伊の国
紀伊北面おとな

川のみなかみを
立ちて
んぢ山ふもとせ
神さて来るま
らりてはぢひ
ゑ稲荷かミの
ぐ里へ狐の嫁へ
お稲荷をかつぐは

だうもき稲荷さ
まなのゑ国町
のそそもさし
づゑ（コヨウ）あるらきやさきやこんこんや
女良なかうとを
まつまきまろろ
くらな黒ぬい
ふるるつまくれて

子まで出たる
ちのぶづま
金時
金時がお熊をふま
へてまかり出て
石二ぢすてのく
松林ずつ松林
けい見たなべれ

つな綱の大将
あやまるず神ぐ
さうぐうたうう
ちれしんいき
くぎやうあよも
ちまきい勝負が
なあやあ先ぐ
さ

二人が中

天が中を天照す
天の岩戸は夜明
の国。ながぐつた根
死きにてん恋と
情と寿とよせ
三つ北山を怒
四さん泣るが恋

八海瑞瑞よ及魂
ちとあぶ文句
納涼ハきぶ恋
の神あだを
きやう守り神
出雲を御存じ
縁むすび
ぐつたつくだぶ

一富かの岩
清水
海寿
年天
藝者れ
守護神
奇妙
色見
ちぼさつ
風見
なびく柳
高

仏教のかが不

あだな笑がる
一ぱいれで
業高ふ雑子
のるもあり
ろ此文を雁
の言伝なるむ
つ見のなり
ろ捨なるる

都鳥見てと羽
がらの肌よいゞい
きしめされたう
其処ゑ流り山
うれしい首尾じ
やなかいかしな
いたいでじや
いきてでやの寺

あさのなかへあやめ
咲くとはしほらしし
やヨイヨイくヤサ
帰る
宇治の柴舟を勝
瀬をわたる私しや
君ゆゑ大かれゆ
く
命をひとことと忘

仕事が忙しくて
咲かせる事出来ない
事を多くの人
さびしがる
ゆきまえ
分の事をなさい
命をもなる様
分で初めきか
事出来ません

お蔭と一生
お蔭と一生くらす
なるみ山のおくの
お住まれ様か
百年已ばかなる
昔の有さら
しぬい針仕事
いとやまん

一雲と巴

ゆきは巴る傾き
きる傾風がさし
のなかぶきで蝶
と手をもれ三ヵ箱
溶と水すか陽
ねら雪またこち
青ぶくなかつ

妻恋雪

初春きかつきつ
ぶどうや人のわを
しら梅れかぶと
かすく時なく
エいじれわたい恋
の浮世が濃世が
恋が一寸一寸恋

恵文

梅と松

梅と松とや若葉の
ますますもしかれて
泊縄わぎりならば
うそぶやあい
かやうんぶそら
海老の腰とや手代

まぐも友白髮ようく
イくあの中よい
とさうへゆづりを
のてもマア明りまて
おめでたい事じ
ヤエ

門の青柳
むつとして帰ぞ川

の青柳くもり
胸を五月雨のまふ
晴れてゆく月社
影なほば微なる
てかな

二上里

初の霜
白糸の縫え換
を人とをつらき
る秋の物そもき
あだ子計ひ来る
月を眺めし
才の枕のさそふ

松むしの音もたえ〳〵まいとゞ尚
花ゝふくかぜの音
づれをさそわと
待そびしき
の涙も露のおき
てゝいしふてま
ろ袖のうへかな

御所車
香も迷ふ梅が軒
端の白ひ匂ひ花
も逢ふせを待つ
身のあけぼの暁
き思ふ人の宵く
初寄も恥かく
まだとゝかぬる宿

ぶり雪よ思ひ
を深草の西夜
もかよふ恋の雪
思ひのかれ
の沐よ枕かじ
き狩もをがら
東下りをるさめ
のへうと
中将のあ河まの
才へ行くら雲の月
狩の色よいやま
まるたひのおを
荷をおもみや
げかへるあふみ
北かぐやだより
海かぐまずが
みゆ山琵琶わの

みべをたどりつ。
やがて三河八
橋かきつばた。
さァきつゝ旅ご
ろも。さッさと急
いで海おりま
せう。

一月の八日

月の八日をお茶屋
さまよ。やく〳〵参
まのいう向の道で。
ちらとえん初め
大振袖よどゝ世
今宵を忍ぶよゝ
ふゝ。忍びてお
ねまを歌まれて。

也、力でちょんぎ
らるゝとまくよ
さまよ〳〵。

雨

雨さしっぽり
ぬれ黄色な花
風よ匂ふ梅がか
の香よたえぬれ

しらぬ。やゝ小さで
さて一本まるゝ蒔さ
たる金まをひとら。
わすれ黄色なゆ
しを梅。やがて
ゆまく金まくよ
なるなら。サア芳
宿梅じゃふゝか

いな。

やなぎ

やなぎで世を
面白う受なくく
らせが年の某。
梅の花ひ梅ふ
びは其の影
の風流嘘し

陳皮茶理な
し。初めをすいは
ゝへどは日まは
不れてつい思ひ
なりびらわれ
味のうきおとひ。
どうしたいや
う事の顛末か。

あぶくらられたる
月ぐヤエ。
あぶくる
立て雨のそらに
一部分くぎすず」
そなて潭也を水
曲寺の明恩を
なるを後淑口中

四の素を振る尾で
さゆる間なる堀
坊やさくやまく
のあやぬ岩
雪とふ字
秋の七夕は
青き弧を畏が
月をさがす君

を書門もなく
春の細雪と恋と
ふる字がわかか
雪をきんて
雪をきんて雪を
ふる涙をどうせ
来まいとまん中
へ一人ら寝ると眠
まらなん時ぶや
エ、寝れぬ
ら寝かい
夜の雨やみ雪
かたらみぶん紙
で睡のすまなか
出ずらまで燈の
丁子をとんぶな

時分等ぐ引
まんすエヘぬの
部

一ずの白酒
ゑゑゑゑゑゑ故石三
の白酒と申ま
也和歌の玉三
保の酒と伯龍と

いふ濃河の天人と夫
婦なり其天門
男女の乳ぶさ
流れ出てたる
を見て造るを
酒なるゆえ
それゆゑ
第一妻の年の

里まをかれをるや
来方朝ハさの酒を
八杯のんで八ふ年ま
た酒名おの名八三
杯飲んで三ふ年
三浦の大助百六つ
てゐさッてゐる蒼
年の長い富士

の白酒〳〵

渡の川岸の果を
ゆるりそて上るや
れ三十石船る清き
ながれを吸むみ水車
めぐる珠を皆みな
竿さいい盃押へ

てすにしや酔うて
伏見へくだまき縕
よかりした処か千両
松よ〳〵〳〵

桜へ

桜へさくら霧ヶ嶋さ
ぢん花なんだのき
つきか今宮か萩
ぐふきんな葉あげ
んじあやめかきつ
ばた女郎花蒲
公英さけ〳〵紅
花さかしやれ白
がすきならいゝ
牡丹紅梅美人
草よじやエ

一十日ゑびす
十日恵比寿のけう里
物をはせごろ
とばちゝ銭かます
小判の金を第左右
帽子いでばすさい
槍たぞわの一笹
をかゝげて手ちら迎

まてお客の身のまて
い方々の茶屋を
三番叟で振り
紙子のべゝを着て
編笠かぶって門
よりつ」まてあゝ
の対の男ては三
井か鴻の印か張色

陸か清水して其
俗を探る自分な
ものとも到つれて
乗物つらしたもの
第りしたらばよかろ
がそりゃなんん

三ツ
八重一重
八重一重 山吹の
花化粧 娘すがた
よい揚屋の
ちらでめさん
る逢うてなぜ中
あと悔むな延か

いでは ふいのいな

狩ぎくら やうかれ

鶯がまいくと 花

の木かぐる 誰やら

が居るわいな と

ばゝさうな芽

ふき柳の風まし

まるて エハふるゝ

と オサさうかいふ

さうしゃいな

梅ぶの香

梅が香やうかれ

黄色鶯多 花の枡

ま鶯うて居るてい

な主を 宝づよく

歌ひ乙まずる情ら
ハエ、ちんさらしオ、
ササうじゃいふさう
じやいあ。

黒髪

黒髪の結ぶ形ら
ゐをば解とわく狀
の枕と獨り寝る狀

を仇枕とてをか
ざして妻じゃと
いうて。恋慕な女
子のんを出ずず。
しんと深山なる
鐘の聲。夕べ北
雪の庭さあ
てゆかしなつかし

やらせなやつを
をとらで猫も
白雪

夜梅

夜ざくらやうかれ
猫かまいとゝ紀
の木がけまう後やら
が居るわいなゝと

ぼけさんふく芽
ふき柳の風ふる
まれてエいふ子
くゝと」ヨイトさら
おいな」さらじゃ
いな

住吉踊

わが恋を住吉踊

の甚だ唯書
ひとまつ
をうゝ
夜つゆ
さらでとめて帰
を夜を可
とさのゝ
なりとなりて別

れて又ぶけんもじ
猪牙北浦寺狩
家ゐて跡を
物うき狗り寝を
ゐたが苦界
の中かいな
れて通ふ
れて通ふ

まだからう今宵
は逢うと聞の狩道
ゐなびくさきゃ
九郎ゐるやきぬ
のまちゃ上ちつ
め山を越て逢ひな
ゆく

一

梅みてゐを
つそまぶ梅
夕ぎくらちよい梅
ぎくらと後を名
ゐそかい
ゆきみるもゆび
一を逢をや
んせなんどまじ

ゆびきぶや
たてやいのんどろ
ちらまるる
なぜ引くく
柳ゲ枝の白水鉢
ヤシくの弱蒙ず。戦ひ敗
北する時ハ、無も敗北するふ
らば、涙で陣笠リレ軟む

4ヨンキナ

ほらーふ、ほらーふ、ヤ
シく笑けく、李鄰よわ
さで、北京が偽。

春さめ

戰ひは、すっはりまける。
支那の兵、刀風するとき日本
刀、いかてかてやうたうちく、

小供でさへも一ぱい助る、御国
思ひの気ハ一ツわくーや内
職迄ハ兵ゴとしてお金ガ澤
山出来たならサア義勇せ
うでいないかいなち
縁(えん)かいちふ
支那の兵士ハ弱いもの、牙
山平壌海洋嶋、あたる大砲

一撃ま、勝利ハ日本の勇かい
ナ、
いさむ日本の陸海軍、數
度の戰大勝利　今ハ北京
を乗ッ取りて凱旋あげるを
待つわいあナ
国の為めとて丈まガ日本魂
はげまーて間もなく落す

北京城今ヨ電報來るわいナ

綱鉦

陸ハ師團ヲ分遣シテ平壤
門へと着きまはける、折ー
ま彈丸列ーきまと其中ニ敵
のリツ首ヲ掴み、引屋さんと
叱と引ク支那ハ間えし弱
しものまて、我將校ヨ兩掌を
合はせ、よゆれ免ーゆれ、
頭がぬける、頭ぬけるは厭
ひハせねど、世ふつゆりの賞
與金、ふくふるハく泣いて
賴んでゆるーを元へど殺
されうかと私ーや気よか、
る、誰れぢやく人ぢや方
いもの豚ぢやゆるの、鐵

砲も刀もなんチも入らない。
サッサ逃げ行け〳〵

髭のほつれ

清の奴等ハ佐倉の寺
よ、あとは麻布へ預け
られ、みじめじやエ、
自國の恥辱おやゆ矣は
んせ

越後の國の
とりこまなつた支那の兵、
國を出るときや、大勢
づき丸をこくらつて、び
つくりして、腰を抜こ
ます顔いまぬけ
で泡をふく
夕まらふた花嫁こ

きのふ着いたる支那の兵、
背のそろはず拓れた
衣類着て弱い顔し
て笑はれたサアサ命が
助かりやよしく

雨の夜

雨の日は東京近く、
樹影いでひかれ来る、支

那の兵、見物おのり元
ステーションに大勢押し
合ひ待ちくらし年
や蝙蝠の立ち姿巡
査は問ふて呆れ顔
はやくも流石でつい
と生捕り唐人は顔を
ちむけ豚の尻尾をかく

まいてキタライ人 豊な
いと佐倉と病院へ巡査
や憲兵あとからついて、
送りぬく

金時

日兵がく、豚尾かさへて、
錦旗を樹てゝ、敵や清國
うちはたす、野津よ大嶌、
樺山の指揮、支那の弱
兵将あやまらせ、将校下
士卒忠勇の臣、軍機軍
器よ〜あ〜わかつ、日
本刀やかち軍の

魚族豊年踊

沖の暗いのよ煙が見える、
アレハ日本の軍艦(支那を

バ撃ち取れ北京を乘
ッ取れ）
豐年ぢやァ萬作ぢや、
今年ハ清國の厄年で、
日本ヨ討たれてケヨイとま
けて、まけた、清國こそ
馬鹿な面。

女御子

山の月

梅がゆ[illegible]ら柳が

見[illegible]中のよいの

かをねらひて或狩

ひそかなる山の月心

なつぞへ夏の風

柳葉深也

輝な陽を恋ゆ
ゑるやうな雪ふる
そんがら梅か香
孫ふる夏風よ二
枝屏風を押場
て脱ぬの落あ
かう思ひてあ、
ばれのくぜりの

床の涙雨沖の蛙
ゐ鶯ゐすがらん
よ吟くではエ、な
いのいふ

蓮葉

蓮葉ふる空かぐや
姫野の紅ぐちも
ゆの山田社一おぐら

葉つみ女子の前だ
れも結ぶ御ぞんの
神垣やあめの山々
おとの柴ゝ処かさね
ゞ思かるゝ初て
嬉しいなんゆさえ
ようあッぞへおきな
れ分宵しのぞく

ちょと脊戸までざん
ぞかれたらゝ碎
うたふまりのかを
ゆらし
榊まくら
身を一つんを二三
又の流れる渡む
うたゝの君て

逢ふ狩の梶まく
ら暁方の雲の帯
啼くか啼かずの
ほどまずす
かの衾
起て見つ寝て見
つ待てど打ちなく
蚊屋の夢さに啼

ひとり焼火ともる胸
の火の焼ゆるなひ
を窓ーヤんせ

花を上聖

花を上聖か染井の
つぐ日か明日
かと見ぐらしの君
ゆ玉子の狐穴か

いろの女郎衆は
まねのねてうらら
と抱いて寝やわま
里地蔵を拝る見
て去ル外カ叮まと
れぞ」これも高謙
らしなんざます
寒の月

寒〳〵がつい癪
となる胸のまま辺
む寒の月今や来
るかをまつ舟ハ知ら
でまくら枕一形ア
つぎます

涼み舟

夏の夜ぐみを友也

の生涯今尾張新
ふ枝あがる琉球
の月いろ西やがら
ものゆかしかいな

夢の霧

萩桔梗なかす玉
章し此ぞきて月
八重末の夢の霧

君をまつ野辺
ゆすだく更ふり
く鐘の雁のさ
恋をかうしたあ
かいな

春はあけ
霧を尾花と寝
とふ尾花を霧

と寝ぬ人ふたり寝
ぬるねぬいふ
尾花が末をなびかす
あらそはぬ

人妻の別れ

今朝の別れは袖
ぬれて乾くひまな
き上の霜の後冥

のたまをつ
又ゝなきわくかが
らす」朝ゝる風むし
右歌坂

秋の物

物の物を永いあ
はまんまな月
見ぬ人のかんか

ふたて待てぞ来
ぬ北吉つちまい
鐘ぞかす数かな接
も初起きまわし
や聴られて居る
といふ

宵やみ

落ずみの書く玉

づまの北ひて雁ふ
き波る宵やみや
月影なしでぬ
さんさぶれてぐち
なたみざんあ
ひまをして俗な
ふぬぼく昔界を
をしく

落葉

学の葉は寄せ
月をかはかぎり
悔やこほりてを
らくと雪ぶしづく
かぬかぬ雪のゆ
ねてなきすべ
のいろ

君来ずば

君来ずば里へも
入らじ柴の戸よ出
てをかへり帰りてハ
忘れの梅の香を
ぎぬ〳〵ちとせ
風の音をつれよ歌
を見れば見れば

かゞ影をなゞす
月の影
濡ぬ先かゝ浮名
なつすきを家
を忘ひたふ二
人が中を意地
る女風が形魔
しをちらゝと落
ちて花かゝ度のか
げ

めぐる日

回る日の来る近い
とて花木の梅
若やぎてそつ
わらしやし恵
里四かと待ち

見じかねてさく
なきかなて黄
雪の末に見はる
枝を起こしたる
さらなる春の
おかに見世帝あ
をりくるふる
詰茅ふと人

さんぢや
春ぎ雨ふる
道ち玉章事変
て遊うて厚胃
を恋つる雪か
時雨か知風ふく
か可愛の高
ばじ枝ま桃ま等

くさをぎ

雪の肌

玉川の水さらせ
雪の肌つもる
口舌の葉ゐうゐ
ゐ仕ゑ雪田
のもれ蛙
出すだに高ゐず

ゐ又ホ
つぞへ

雪の堤

枯蓮ゆかきを
だ提心をさ雪
狩ぎの月田の
面ゐうゐかぐ
ゐばッと立ては

アレ雁かねの女夫
連

辻うら

辻占や松葉かん
ざし畳みざん
恋ト云字にひ
かされて一人雲の
奴しのんでまゐ

に膳がたつかや
ゑしーやゝとて待
たもたろつをない
ゑいふ

はぢがか保

時雨ふるはお茅が
秋の夕暮に二郎
三郎雁かゝ音のた

すまつの夏や
つらや恋の浮橋
中絶えてやるせ
なみぶのかれ蛍
ゆふぎりもたれぬ
胸の内ゆひやい
ながよいとなな

雪の夜道

いそで通ふる雪の
夜道をしのんぶ
りと裏から廻
ってとんとん
つれ拍子なるた
んせとんとん
身らたいてを
内はお留守か

三

おなぶつか殿子
と二人で寝てかい
な帰りましょ
なしゃんせ

三まくらの
うたかまたの二
御門なれば
金でぶまされて

赤を取とれ山と
なれるが沢山
君寄なれば三
又河の舟のなら
人の内を寄しゃ
んせ

小寄ぶ
上ろうおぐら

ゐよ扱しみごと
かを細染かい
なゐ子家のく
せか高彩で拾
をたゐふ宮若
青四通れを二唱
彩拾ぐしかを
康の子の振初で

一徳を上意を
宮ゐ子細を上
意を崇宮を濯
つを若なゐふ
拾を雨風をげ
しき後すち魂の
あゐを上ほか
みを引をどさと

ゑいを引く紙を
空こえつまま
其彼の人野あ
る高を抜け
すや迷をな
やれ赤らがき
ぶる赤らまれ
夏ひとを夜

がたゝ尾ゆふ
びんのけが天ど
夏七り淵す
いりのねぶ女
枝ちへりかんぞ
ぶちゃ宴ますか
れぶやおな
じやすいの人

じやあかぶとを
あらうるなつち
いらぬへさつさ
あてけり滑頁
てけ

浅草まいりくらら
まいとうれも車

ごうのこうもつくな
〳〵えつくなおくく
んなさいあるのないのと
おつしやらやうな高人体
おやなゝもも井兵助いやめ
き塩釜八幡不動山
て雷鳴門まんたはは
ようはつたりおもちや
中店二十間こざれ先

りまゝ馬太堂へ
参詣してゆくとはおくやま
うんらゆまはす　そめきの
るゝて花見物なる

五大力

いつまでぐさの何時まで
も、なまなかの見え物思ふ
たゝとへ世ゆれて紐ふる
とて、緑と対筐の末を
ゆつ、ちんと世ふ互ひの
うゝうちとけていう
はくはとゆぬ五大力さは
きりなゆら、かはる色な

きぬ丸ん風情、やがて
逢ほそく語らそく
惜〳〵き筆留めい
らこと

きぬぎぬ丸んばらけで
なすとこのぶちやのけん
わのぎざこのぶちや
よく〳〵いらづらあ
なぐひ年をぐ素なす

の木まうらみつもそれ
でなすめぐ黒くなって
けらこてそきく夕顔
ぐちうえんはこり
ぶれきまひ〳〵すこ
まひ〳〵〳〵このぶちや
いろの黒ひとてきひぐ
ひくひとてなすの木は

やをだらまおらやそな
たばさなぶ分分
人の世面へはるのが
むりさやんれはし
奥州のいどでへち
まのつめぎちん
のらんでらうを
さをして大工のら

こぶねやらはら
十日のてまさ
どらすさ
もりや わけ

以下

5/丁

白紙

午の三月
堺西場記
了仕ます